

Title	日本における海外交流プログラムを振り返る
Author(s)	王, 莎莎; 曲, 明椿; 楊, 斯超
Citation	GLocolブックレット. 2013, 10, p. 93-104
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48274">https://hdl.handle.net/11094/48274</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

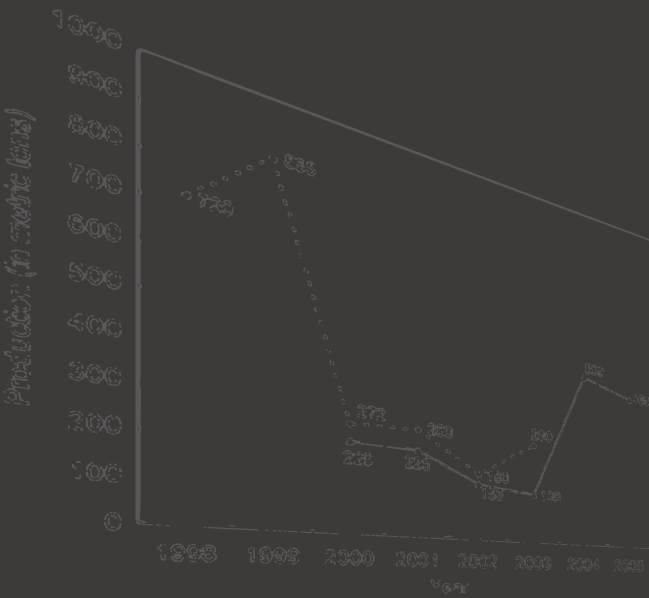
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



## 【第2部】

### 学生及び教員の活動・研究報告(中国)



# 日本における 海外交流プログラムを振り返る

**王莎莎** 中国農業大学人文・発展学院博士前期課程

**曲明椿** 中国農業大学食品安全・栄養工程学院博士前期課程

**楊斯超** 中国農業大学食品安全・栄養工程学院博士前期課程

## はじめに

2010年11月24日午前、私たち3人は北京から大阪へ飛び立った。趙旭東先生、陳芳先生と共に大阪大学大学院薬学研究科とグローバルコラボレーションセンター企画プログラム(GP)に参加するためである。皆が日本に憧憬していた。さらに初来日である。非常に興奮し、出発前はよく眠れなかったのを覚えている。

初来日というだけでなく、初の海外研修という非常に貴重な機会でもあった。日本について断片的な知識しかなく、さらに日本語も理解できないため少し不安であったが、日本研修は大変意義深いものであった。日本では(滞在期間は2010年10月24日～11月9日の17日間)は毎日が充実していた。本原稿では、日本研修の内容すべてを伝えることは出来ないが、特に印象深かった活動や出来事などを中心に報告したい。

## 大阪大学での研修活動

大阪到着の翌日(25日)、大阪大学大学院薬学研究科での国際会議「食と環境の安全・安心に向けたリスクマネジメント」に、26日は学生主体の討論・発表会に参加し、薬学研究科の実験室も見学させて頂いた。当時の様子はパワーポイント資料1を参照されたい。

国際会議には、大阪大学だけでなく中国、ベトナムやタイの教員、研究者、学生らが参加した。各国のグループが食や環境をテー

マに発表、ディスカッションを行った。国際会議への参加は初めてであったため比較は困難だが、中国での会議とは全く異なる雰囲気であった。議論に非常に溶け込みやすい参加型の会議であり、討論は非常に活発に行われていた。発表と討論を通じ、食にまつわる参加国の状況と対策の要点がつかめた。

国際会議の翌日(26日)は、タイ、ベトナムと中国からの学生、教員及び大阪大学大学院薬学研究科の学生(及び留学生)との討論・発表会が実施された。薬学研究科の平田先生がKJ法<sup>1</sup>を紹介してくださり、その手法を応用し、テーマごとにいくつかのグループに分かれ、討論した。このような討論は初めてであり、英語で行われただけあって緊張と不安で押しつぶされそうだったが、今振り返ると大変やり甲斐があった。KJ法は、非常に優れた学習方法であるため私たちは帰国後、中国農業大学・人文と発展学院での報告会において、学生たちにKJ法を紹介し、大きな反響を呼んだ。もちろん、研究室やセミナーにおいて現在でも手法を活用し、社会学から自然科学的問題まで取り上げ、ディベートを行っている。

これまで私たちは、教授の知識を学び、情報を獲得すれば充分だと思っていた。だが、大阪大学大学院薬学研究科で実施された国際会議や討論・発表会への参加を通じ、勉学に対する姿勢について真剣に考え始めた。また、大阪大学の学生のレベルが高いため、努力の必要性を感じた。私たちにとって良い刺激となった。



パワーポイント資料1



パワーポイント資料2

## 水俣見学：水俣病と「地元学」

大阪大学での研修が終了し、水俣へ向かった。水俣で2日間の研修活動を行うためである。

水俣は「水俣病」の発病地として、環境の教科書(研究書)やマスメディアにより広く知られている。だが現在、水俣はモデル環境都市(4年連続日本一)で、町づくりや環境保全の取り組みも特徴的であるにもかかわらず、海外はもちろん日本でもあまり知られていない<sup>2</sup>。

私たちはまず、頭石村(パワーポイント資料2を参照)を訪問した<sup>3</sup>。ここでは自然的価値の再発見の重要性を学んだ。戦後、頭

石村は農業の生産性向上のため大量の農薬を散布した。その結果、ホタルやトンボの姿は消え、農村の風景は激変した。若者は村を離れて都会へ行き、農地は単調な労働の場へと化した。危機的状况から、村人は村と農業を守る必要性を感じるようになった。また同時期、全国的に地方衰退と活性化が注目されるようになっていたこともあり、少しずつ改革を進めていった。変化に一番大切であるのは何か。それは意識の変化である。

変化のヒントは地元の人々からではなく、観光客の言葉にあった。旅行者はよく、「自然が美しい」、「食べ物美味しい」などと村(地域)を褒める。ゆっくりと村やその周辺の自然を観察する。確かに美しさがあるのではないか。そこで村人は、変化とはまず足元を見つめ直すことから始まると考えた。これが有名な「村丸

1 KJ法とは、文化人類学者川喜田二郎(東京工業大学名誉教授)がデータ整理のために考案した手法である。データをカードに記述し、グループごとにまとめ、図式化し、論文や報告書等のまとめに活用する。共同作業にもよく用いられる。「創造性開発」に効果的だと考えられ、大学などの教育機関だけでなく企業などでも幅広く用いられている。また、英語学習などにも応用される。

2 12月4日の吉本哲郎先生が私たちのために行なったセミナーで述べていた。  
3 今回の研修には、水俣市や吉本哲郎先生(元水俣病資料館館長)が協力して下さいました。水俣市産業建設部の松木幸蔵さん(思沁夫先生の知り合い)は研修の最初から最後まで付き合ってくれました。頭石村では、勝目豊さん(村丸ごと生活博物館代表)が、茶園では天野夫妻が、水俣湾では杉本肇さんが、ゴミ処理場では水俣市産業建設部の赤石護さんがそれぞれ丁寧に案内して下さいました。

ごと生活博物館」<sup>4</sup>という活動の起源である。ここで、この前進策の概要を述べたい。村人は案内人(ただし、案内役になるには水俣市の任命が必要)となり、村やその周辺部の自然を案内(村発見)し、有機栽培の野菜を食材とする料理を味わい、観たもの、感じたことを一枚の地図にまとめる。観光客は自然を観察し、食事を楽しみつつ、村と自然の再発見の協力者となるのだ。

頭石村を去り、次に向かったのは茶園である。茶園は海の反対側に位置していたにもかかわらず水俣病の影響を被り、一時期お茶が売れなかった。汚染調査の結果、茶園のある地域に水銀汚染は観測されなかった。それでも「水俣産の」茶と言うだけで購入拒否されることがあったという。私たちが訪問したのは天野さんが経営する茶園である。茶の有機栽培と直販を特徴としている。この茶園の有機栽培の歴史は1999年、天野さんの父の代に遡る。父と息子の2人の努力により、無農薬茶は人々に理解されてゆき、現在市場を開拓しつつある。天野さんは思沁夫先生の友人であり、美味しいお茶を御馳走してくれた。忘れられない味だった。また、有機栽培は自然の力を信じる農法で、自然に対する理解、感性が求められる。天野さんの力強い言葉も心に残った。私たちは天野さん一家と別れ、夕陽の沈む水俣湾へ向かった。

1950年代頃、水銀は水俣湾の魚介類で生計を立てていた漁民たちの生活だけでなく、彼らの人生を一変させた。それでも明るく、自然と共に生きる一家と出会った。杉本一家である。杉本肇さんは、ちりめんじゃこを製造するが、母の影響もあり、現在は水俣病資料館の語り部も務めている<sup>5</sup>。

夕陽に染まる水俣湾は大変穏やかで、息を飲むくらい美しかった。ここで汚染事故が発生し、人々の人生を破壊するなどとは考えられなかった。水俣湾は汚染(水銀)物質が浄化され、きれいな海となったが、人々を苦しめた歴史は時と場所を越えて語られ、1つの教訓として後世に理解されるべきだと感じた。特に印象的であったのは、杉本さん一家の心の広さである。水俣病発生時、

地域社会は分断され、杉本さん一家は、いじめや差別を受けた。この状況に納得しない杉本栄子(杉本さんの母)さんに対し、杉本さんの父は「周囲が変わらなければ、私たちが変わろう」と話し、決意した。工場から排出された水銀により漁場は汚染された。魚介類の販売不振に陥り、収入源を喪失した。社会から不当な差別、いじめを受けた。それでも相手を受け入れるため、自身を変えようとする。その心の広さに深い感銘を受けた。また、「自分は汚染の被害者となったが、自分たちは絶対に被害者を作ってはならない」と無汚染、無農薬などの環境と健康に配慮した「健康商品」の製造、販売に早くから取り組んでいる。

水俣での研修2日目は、水俣資料館、水俣湾公園、かつて工場から排出された汚水の排水口などを見学した。ゴミ処理場も見学し、担当者(赤石護さん)から詳しい説明を受けた。世界的にも日本はゴミを分類、再利用する、いわゆるリサイクルの先進国である。日本国内であればどこでも、ゴミは普通4、5種類に分類され、処理される。驚くべきは、水俣市では30種類近くに分類されていることである(パワーポイント資料3を参照)。



パワーポイント資料3

水俣病は日本の公害問題の原点と言われている。しかし、長く人々を苦しめた公害問題が、地域を大きく変えたことは、どのくらい知られているのだろうか。冒頭でも触れたが、水俣市は環境モデル都市に4年連続で選ばれている。水俣市民の語りと市や村の活動から、私たちは特にゴミ回収と教育について印象に残っている。ゴミは定時に分類基準に沿って、回収される。この取り組みには2つの意味があると考えられる。汚染防止と資源の持続的利用である。

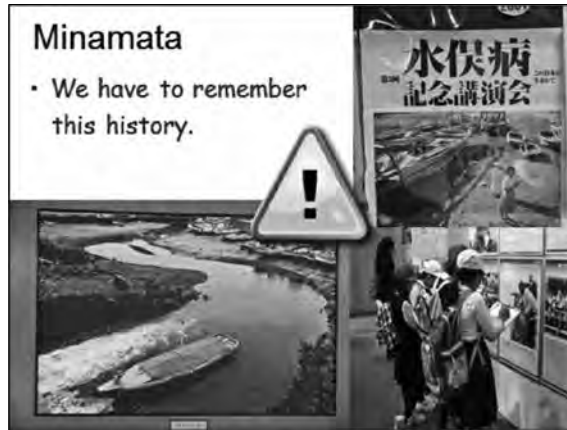
水俣病資料館での見学時、多くの小学生や中学生も来訪し、熱心に勉強していた(パワーポイント資料4を参照)。資料館の館長は、水俣病資料館は教育の場として地域の学校だけではなく、全国各地の学校関係者や一般市民にも利用されているとい

4 吉本哲郎先生の「地元学」はこの村からヒントを得たとも言われる。

5 杉本肇さんの母、杉本栄子さんは今から2年前に亡くなった。資料館には彼女の写真が飾ってある。思沁夫先生は2007年から杉本さん一家と交流がある。思沁夫先生は、杉本栄子さんの「水俣病の研究で多くの研究者が生まれ、彼らは教授になったが、私たちの状況は変わらなかった…」という言葉に大変考えさせられたとよく述べていた。

う。有機農業、持続可能な地域づくり、共生社会が、かつて日本の公害問題の原点と称された地で形成された。歴史の皮肉さも感じつつ、これは被害を被った患者たち、村人とNPO団体や市、町などの主体的な努力と知恵の結果であり、悲慘さを原動力に変えた日本人の素晴らしさと思えてならない。

チッソ会社の排水口(百間排水口)には、日本語と英語で書かれた看板があった。看板には以下のように記されている。



パワーポイント資料4

“No matter how great an amount of money or is spent, it is impossible to return a once-polluted and all but destroyed environment to its original state. We must recognize this as a lesson to the human race.”

私たちは環境汚染により、おそらく永遠に失ったものがある。教訓を忘れてしまえば、未来も失うかもしれない。

水俣湾公園には、緑の木々や花々が植えられ、整備されている。ここは水俣病で亡くなった方々に祈りを捧げる場所でもある。私たちもここで鐘を鳴らし、黙とうした。公園の対岸にロマンチックな恋人の公園があった。未だに多くの課題や矛盾を抱えつつも、日本は公害問題の教訓を活かし、環境重視の政策を進め、環境保護の高度な技術と豊かな社会を実現させた。環境問題の多発する中国で生まれ育った私たちにとって、水俣から多くを学んだ。

今回の研修で大変お世話になった吉本哲郎先生は水俣出身であり、大学卒業後、水俣に戻り、市役所職員となった。水俣市役所はチッソ側に加担し、水俣病患者の要求(救済)を拒否し続けてきた過去がある。そのため水俣病患者の治療、支援が遅れた。患者を続発させ、社会分断の時代を招いたと言われている。一方、吉本哲郎先生は患者の声を聞くために患者を訪問し、謝

罪した。努力が実り、役所と患者との対話を成立させた。吉本哲郎先生は水俣病資料館の創設にも尽力し、長年館長を務めた経験もある。

吉本哲郎先生は、地元を元気づけようと「地元学」<sup>6</sup>を作りだし、その普及と実践に奮闘している。今回、先生は大阪大学にて特別講義「地元学とは」を開講して下さいました。本講義での学びは数えきれないが、特に印象に残ったことがある。健康と環境は同じものであり、3つの要素により構成されていることである。つまり、人、自然、地域の健康である。この3要素の1つでも欠けてしまうと健康は成り立たないと述べていた。かつて水俣では、全要素が欠落したため、地域は分断され、人々は病に陥った。地域再建のため「風に聞け、土に着け」しかないと述べる。樹に聞く、田畑に聞く、山を観る、風に耳を傾ける、そして自分で考える。哲学的かつ詩的な言葉で語る授業はあっという間に終了した。非常に内容の濃い授業であり、刺激的であった。

## 食品安全と健康・環境

食の安全と食文化(環境)は、日本研修の主要テーマの1つである。大阪大学での研修のほか、大阪市中央卸売市場やスーパー

マーケットの見学などで取り扱われた。

大阪市中央卸売市場は、近畿地方最大級の市場で、青果と水産物を扱う。この市場の特徴は主に規範化、管理化された農産物、流通システムである(市場の様子はパワーポイント資料5を参照)。農産物は、農家から各地の農協、あるいは仲介業者を通じ、競り売り業者や問屋に収集され、競売、あるいは卸などを経て、スーパー、店舗や個人消費者の手元に届く。



パワーポイント資料5

6 地元学に関して、詳しくは『地域から変わる日本:地元学とは何か』(2001年)を参照されたい。

このシステムでは物流が明瞭なため、管理、責任追及しやすい。本制度に基づき、日本で安全かつ安心な農産物が消費者に提供されている。

卸売市場の第2の特徴は、衛生・安全管理システムの整備である。市場内に、「大阪市中央卸売市場食品衛生検査所」が設置されている。一方、中国では食品衛生検査所は卸売市場外部に設けられ、運営は別部門が担当する場合が多い。中国のシステムに比べ、日本では安全を確保した上で、食品の鮮度を損なうことなく消費者に届けるというサービス精神が旺盛である。

食品衛生検査所職員の説明によると、食品衛生検査所は主に以下の3つの業務を担当している。①現場検査。つまり魚介類の有毒検査、食品の鮮度確認及び施設内の衛生状況検査を行う。②実験室での検査。主にバイオ検査と理化検査を実施する。理化検査では、食品添加物、残留農薬及び環境汚染物質の検査などが挙げられる。③教育と衛生指導(問い合わせなどの対応)。関係者のみならず、一般市民に対し衛生や食品安全に関する知識の普及活動を行う。食品衛生検査所では優秀なスタッフが働き、優れた設備を備えており、市場の食品衛生安全確保と維持に非常に重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、疑問点もある。食品衛生検査所での検査の多くはバイオ検査である。時間と労力を浪費しているため、迅速に新鮮な食品を消費者へ届けるのは困難だと思われる。

市場は環境保護を重視し、様々な対策を講じている。市場内を見学した経験のある方は“Turret Truck”と書かれた運搬車をご存じだろう。ガソリンではなく電気で稼働する車である。温暖化対策だけでなく、市場内の環境汚染を防ぐ観点から導入されたと聞いた。また、市場の敷地内に大型ゴミ処理場がある。この処理場では市場から排出された有機ゴミを発酵させるなどし、有機肥料に活用している。有機ゴミ処理だけでなく、ビニール袋などを回収し、リサイクルも行っている。中国の市場では汚臭が漂うが、大阪市中央卸売市場は異なっていた。日本の市場から衛生管理、環境意識など、中国の卸市場、食品管理部門が学ぶべきことは多い。

食品に関しては、日本人のほとんどはスーパーで食品を購入するそうだ。要するに、スーパーは食品安全管理上、非常に重要である。私たちは大阪市、神戸市などのいくつかの大型スーパー

を見学した。得られたデータは不十分だが、観察などをもとに私たちの意見を述べる。いかなるスーパーでも共通していたのは、国産食品と外国産食品の価格差である。例えば、国産ニンニクの場合は1個258円だが、中国産は99円である。日本は食糧自給率が低い(約40%)ため、多くの食品を輸入に頼らなければならない。

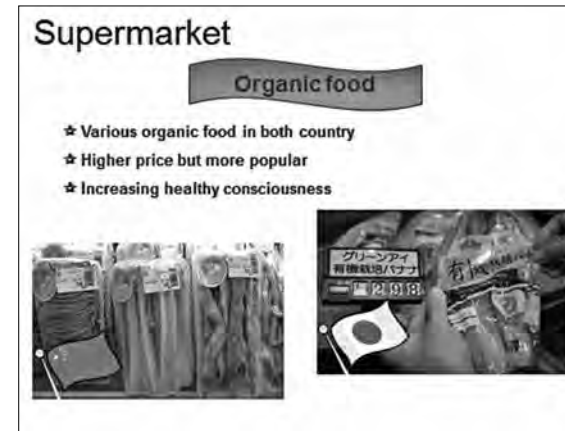
一方、日本人は「外国産は信用できない」と考える場合が多いようだ。この矛盾はおそらく国産に対する信頼性が非常に高いため起こるのだと推測する。

大型スーパーには、有機野菜のコーナーがあり(パワーポイント資料6を参照)、また遺伝子組み換え食品ではないと明記された食品も発見した。日本では食品に栄養成分表だけでなく、遺伝子組み換え食品か否かを明記する義務があるという。私たちは断片的な情報しか持ちえないが、日本人は食の安全に対して危機感が強いのだと感じた。だが、自身の健康のためであるのか、あるいは環境への配慮なのかは不明である。

さらに、日本のスーパーには揚げ物がたくさん陳列されていた。しかし、野菜の種類や量などは中国に比べ比較的少ない(パワーポイント資料7を参照)。中国において、揚げ物は健康を害するとして、摂取を控えるのが良いと言われている。そこで、なぜ食の安全に厳しい日本で揚げ物が多く消費されているのか疑問に思った。今

回はこの疑問を明かにすることが出来なかったが、今後の課題としたい。

中国においても、食の安全に対する関心は高まっている。主



パワーポイント資料6



パワーポイント資料7

な要因は、危険な食品の存在、先進国の食品の安全性と健康ブームの影響と考える。だが意識の向上が見られるとは言え、不明瞭な点が多い。今回の研修では以下の3つの概念に対し、理解が促進された。

### ①有機食品

来日前、「有機食品」とは、高級食材(良品質)というイメージしかなかった。だが、日本の「有機食品」は、環境汚染、環境破壊、そして人々の健康と生命に対する脅威という悲惨な歴史と関連している点が水俣訪問で明らかとなった。日本では、自身の健康はもちろん、環境保護の観点から有機食品を選択する人々がいる。中国と同様、市場に誘導され有機食品を購入する者はいるが、一方で環境や健康を考慮した消費者が多いのではないかと考える。有機食品は、高価格であるため購入者は多くないだろう。有機食品は、健康だけでなく環境も含めた概念であり、日本では中国に比べ広く理解されている。

### ②遺伝子組み換え食品

遺伝子組み換え食品は、米国などを中心に普及しており、同国の推進により世界的拡大傾向にある。一方、遺伝子組み換え食品の安全性については疑問と懸念の声は根強くあり、議論が混迷状態にある。中国では一般論や抽象論が主流であるのに対し、日本では生物多様性、健康や倫理など様々な視点と、生活と環境にもとづく現実主義的な観点が特徴的である。この違いは、日本と中国の社会や政治の制度的相違が背景にあると思われるが、日中間の文化的差異も存在するのではないか。既述したように、スーパーにおける非遺伝子組み換え食品表示から、日本人は遺伝子組み換え食品の普及に対し慎重派が多数であることを示唆していると同時に、消費者側の視点の反映が推測される。また、遺伝子組み換え食品についての議論と思考の相違はあるものの、日中両国で関心が高い点は共通している。双方を注意深く観察することにより、遺伝子組み換え食品についての視野が拡大した。

### ③インスタント食品

多くの中国人(特に大学生)にとってインスタントラーメンはなく

てはならない存在である。総理の名前は知らずとも、「康师傅」(中国のインスタントラーメン)を知らない人はいないという言葉が象徴するように、中国でもインスタント食品は急速に普及しており、食生活や食文化を大きく変化させつつある。しかし、インスタントラーメン発明記念館(大阪府池田市)訪問まで、インスタントラーメンの起源が日本だとは知らなかった。

インスタント食品は、科学技術の進歩と共に、人間の利便性追求により開発され、普及した。現在、日本など先進諸国から発展途上国へと急速に普及、拡大している。インスタント食品は、周知のように、生活を便利かつ豊かにした反面、食品安全・健康問題をはじめ、食の崩壊など数多くの問題をもたらした。特に近年、中国の農村地域ではインスタント食品が浸透する一方、ゴミ処理施設が存在しない場合が多いため、インスタント食品のプラスチック容器やビニール袋などが村に散乱するありさまである。農村の環境を破壊し、さらに食文化にも影響を与えているのだ。

## 終わりに

大阪大学吹田キャンパス近くにある国立民族学博物館(以下、民博)は、世界中の人類学者、民族(俗)学者なども一度は訪ねてみたい博物館である。民博の展示品は世界中から収集され、膨大な量に上る。ここでは以下の2点から、食や環境を考察するためのヒントを得た。

どの民族の文化も、農と深い関係性を持つ。農に関する儀礼、信仰、技術などは多様であるが、農が生活、文化の礎であることに変わりはない。展示品の説明書きを借用すると「農は天下の源である」。

また民博では、特別展「彫刻家エル・アナツイのアフリカ—アートと文化をめぐる旅」(2010年9月16日～12月7日)が開催されていた。ある世界的な彫刻家は、異なる歴史、社会や文化的な背景を融合させつつ、「ゴミ」を「芸術作品」に変え、世界的絆を強調している。彫刻家はグローバル化には世界を分裂させる側面があり、都市と地方、人と人を分断し、孤立化が世界中に進行するという危機感を持っている。そして彼は、共生は繋ぐことから始まると主張していた。魚を採る網からヒントを得た「壁」とい



う作品は、彼の思想を表している。彼は助手と共にビール瓶の蓋を鉄線で繋ぎ、1つのカーテンを完成させた。このカーテンを壁にかけると、1つの空間を認識させられる。だがカーテンに無数の穴が存在するため、一方の空間と完全に切断された感を与えない。また、このカーテンは使用済みの物品を再利用している。つまり、見る人と使用した人を繋げるのである。

私たちは、本プロジェクトに参加し、大阪大学の学生や教員らと出会い、水俣や様々な町とも繋がった。この繋がりを通じ、食や環境を考え、自然と社会が繋がり、技術と文化の調和する研究や仕事をしたいと切に感じる。

(思沁夫訳)